

1年 生活科学学習指導案

授業者 吉田 健人

1. 単元名 「わたしは おてつだいマスター」(自分の成長)

2. 単元の目標

- 「おてつだいマスター」を目指す活動を通して、自分ができるようになったことを知ったり、家族の一員としての役割が増えていることに気付いたりできる。 [知識及び技能の基礎]
- 自分の選んだお手伝いの方法を調べたり、実際にやる中で試したりすることを通して、よりよいお手伝いの方法を考えることができる。 [思考力、判断力、表現力などの基礎]
- 「おてつだいマスター」を目指す活動を通して、自分の頑張ったことや成長したことが家族のためになったと気付き、今後も自分でできることを増やそうとしている。 [学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと教材

(1)子どもについて

本学級の子どもは、給食の配膳台の準備や授業後の黒板清掃を進んで行う。火曜日と木曜日に設定されている清掃の時間にも「これだけゴミが集まったよ」「ここも拭いていいのかな」と取り組む様子が見られる。それらの行動の背景には、「クラスのためにはたラきたい」という気持ちがあるのだろう。その根幹には「誰かにほめられたい・認められたい」といった気持ちもあるように思う。集団生活の中で自分が過ごす空間に目を向け、みんなが過ごしやすいうようにしようとしている。小学校1年生なりに他者の気持ちを考え動くことができるのは「しあわせ3組」のよさの一つであると考えている。一方で道具箱や机、ロッカーの中といった身の回りの部分においては、担任が意図的に声を掛けないと散らかったままになってしまうことも多い。全体で使う場所に存在している個のスペースを整えることが教室全体の掃除と同様に自分自身やクラスの友達が過ごしやすくなることに繋がるという実感がまだないのかもしれない。保護者と面談した際も「家のこともたくさんやってくれます」という話が出る一方で、「もう少し家で片付けをしてほしい」「ずっと遊んでいて…」といったマイナスな話が出たこともあった。子どもが自分と家庭の生活との関わりを見つめ直し、自分のできることについて考えられるよう子どもの身の回りに焦点を当てて活動を進めることを大切にしていきたい。

本単元で子どもは「おてつだいマスター」を目指していく。その中で「自分でできた」「きれいになって気持ちがよい」と感じて欲しい。また「自分のためにしたことが家族や友達のためになっている」と感じることもできるだろう。日常生活と密接に関わるであろう「お手伝い」に生活科の授業を通して触れることで、子どもの生活がより豊かになることに繋がってほしいと願っている。

(2)教材について

子どもにとって家庭は家族と過ごす大切な場所の一つである。家族一人ひとりが家庭内の仕事や役割を果たすとともに、思いやりや愛情によって支え合うことで家庭生活は営まれている。子どもにとって家庭生活は生活の基盤である。しかし、子どもを支えてくれる存在があまりにも近いと、家庭内の仕事や役割に目が向きにくいこともある。

本単元では家庭生活と関わりの深い「お手伝い」を扱う。本単元で扱う「お手伝い」とは「上靴洗い」「洗濯物たたみ」「窓ふき」「掃除」などである。これらの「お手伝い」は家庭生活と学校生活どちらにも関わるものである。例えば上靴を自分で洗うことは、家庭内においては「自分のことが自分でできた」ことになり、家庭内における自分の役割を果たしていることになるだろう。学校では、きれいになった上靴を履くことで衛生的に学校生活を送ることができるだけでなく、自分や友達が「きれいになって気持ちよく過ごせる」という気持ちが芽生えることに繋がるだろう。「どうやって上靴を洗ったらもっときれいになるんだろう」と道具を変えたり、家族に聞いて調べたりする中で試行錯誤することもあるはずだ。何度か試す機会を設け、やり方を吟味することで「前よりも上手にできた」

という達成感や満足感が得られるようにしていきたい。

本単元で子どもは一つのお手伝いを選択し、「〇〇のおてつだいマスター」を目指していく。同じお手伝いを選んだ子ども同士で関わり情報を共有したり、一緒にやってやり方を教えたりする姿も出てくるだろう。お手伝いに対して経験値が異なる子どもが教室という空間で「おてつだいマスター」になるためによりよい方法を目指し試行錯誤するだろう。その中でやりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向けて進んでいくことを願っている。また、本単元で学んだことが、その後の家庭生活や学校生活の整理整頓、掃除などにも繋がってほしい。

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』

「洗濯物をたたむ」「上靴を洗う」「窓ふき」「掃除」といったお手伝いは小学校1年生でも挑戦しやすいものであり、子どもたちも「やってみよう」と興味をもちやすいものだと考えている。そのお手伝いを通して家庭生活に目を向けることは家族の一員としての役割を考えたり、家族に支えられている自分に気付いたりすることになるだろう。

第①時ではまず、家の仕事について振り返る。自分や家族が普段している仕事を振り返る中で、ぼくはお皿を運んでいるよ」「習い事が多いからほとんどやってない」といった家庭環境による違いが表出されるだろう。「ぼくは洗濯物をたたむよ」「その仕事は私の家ではお母さんがやるよ」といった家庭によって担っている役割が異なることも見えてくるだろう。また家族が様々な家事をすることで自分たちの家庭生活が成り立っていたことにも気付くかもしれない。家の中に様々な「おてつだいマスター」がいることを知った子どもは「自分たちが家でできることは何か」という問いについて考えていく。「服を畳むことはできるかも」「自分のことは自分でしたいから上靴は洗おうかな」と自分たちにできることに目を向けていく時間になるだろう。その中で自分になりたい「おてつだいマスター」を選択していく。

第②時では、第①時に選択した「おてつだいマスター」に向けお手伝いを試す。個々が決めたお手伝いに必要なものを用意し、実践していく。「ゆっくりたたむときれいにできる」「バケツの中の水が黒くなったから、上靴が汚れていたんだ」と気付きを得ながら取り組んでいくはずだ。同じお手伝いをしている子どもが近くで活動できるようにしておくことで自然と自分と友達のやり方を比べる子どももいるだろう。他者とのズレに気付きやり方を変えたり、友達に声を掛けて相談したりすることで自分の中の上手いかなさが見えてくる子どももいるだろう。よりよい方法を探す中でやりたいことを吟味し、思いの実現に向かっていく姿が見られ、そこに『その子らしく学ぶ』があると考ええる。

第③時では、自分がやってみて感じたことや、家族に聞いて得た情報を全体で共有していく。「洋服を畳むとしまいやすかった」「上靴を洗うと気持ちよかった」といった感想ができるだろう。しかし中には「服の大きさを揃えるのが難しかった」「上靴の細かい部分の汚れが落ちなくて嫌だった」といった困り感を抱えている子どももいるはずだ。上手にできたと感じている子どもの中にも「もっと簡単にできる方法はないのか」「短い時間で綺麗にできないのか」といった「もっと〇〇したい」という思いをもっている子どももいるだろう。同じお手伝いをしていた子ども同士で情報を共有することで「こんな方法もあったのか」と新たな気付きを得ることもできるだろう。また家族に聞いたことも同時に伝え合うことで「家によってやり方が違うのか」といった生活環境によるズレも知る機会になると考える。その中で次時のやり方を選択していくことは、これまでのやり方を立ち止まってふり返り、見つめ直す機会になるはずだ。

第④時では、再び自分の決めたお手伝いを試す。第②時での経験や第③時での情報共有を経た子どもは「前回よりも綺麗にしたい」「上手にたたみたい」といった思いをもって活動をスタートするだろう。子どもの更に上手になりたいという気持ちを支えるためにも試す機会をもう一度設け、子どもが試行錯誤しながら活動ができるように支えていきたい。また同じお手伝いをしている子どもが近くで活動できるようにすることで、「前回とやり方を変えたのにやっぱり上手くできない」「もっと細かいところを綺麗にするにはどうすればいいんだろう」という困り感をもった子どもが他者のやり方を目

にしたり、聞いたりすることでヒントを得やすいようにしたい。そうすることで「こうやったらできそう」と思ったことをすぐに実践することができるだろう。

第⑤時では、自分の目指してきたお手伝いの仕方を友達に伝える。くり返し試し試す中で気付いたことを他のお手伝いをしていた友達に伝える中で、子ども自身がこれまでのプロセスをふり返る機会になるだろう。「そうやってやるとできるんだね」「わたしも家でやってみようかな」と子ども同士が価値づけし合い、おてつだいマスターになった達成感や他者から認められたことで自己を肯定する気持ちをもつことができるはずだ。また、他者のお手伝いを知ることで、その子自身のお手伝いの幅が広がる機会にもなると考えている。

第⑥時では、単元全体のふり返りを行う。「服の畳み方を揃えるときれいにしまえることが分かった」「上靴がきれいだと気持ちよく生活できた」と自分のできたことに対する達成感や満足感をもつだろう。「家族に喜んでもらえた」「自分のことを自分ですることも家族のためになることがわかった」と家族の一員としての役割を実感する子どももいるだろう。

おてつだいマスターを目指す活動は子どもの家庭環境やこれまでの生活経験の影響を大きく受けるだろう。子ども同士が異なる価値観に触れながらよりよい方法を探っていく経験は、これからの日常生活に繋がっていくと期待している。

5. 単元構想(全6時間扱い/本時は第④時)

＜教師の投げかけ＞子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

① ＜家の仕事ってどんなものがあるのかな＞

- ・ぼくは毎日お皿を運んでいるよ
- ・お母さんは料理をしたり洗濯をしたりしているよ
- ・お父さんは窓やお風呂を掃除しているな
- ・私の家ではお兄ちゃんがお風呂掃除をしているよ

○子どもが家庭内での仕事に目を向けることができるようにワークシートと付箋を使ってイメージを膨らめる場を設ける。

＜自分たちが家でできることは何だろう＞

- ・いつもお母さんがやってくれる上靴洗いをやってみたいな
- ・洗濯ものを上手にたためれば、体操着の持ち帰りもしやすいかも
- ・そうじの時間に窓をやっているから、もっときれいにできるように窓ふきをやりたいな
- ・床が汚いと過ごしにくいから床掃除をやろうかな

○何のマスターを目指すか迷っている子どもが決められるように、保護者が書いたアンケートから作成したおてつだいリストを用意しておく。

② ＜おてつだいマスターをめざしてやってみよう①＞

【上靴洗い】

- ・まずは水洗いをしてみよう
- ・バケツの水が黒くなった！汚れがでてきたな
- ・ブラシと洗剤で洗おう
- ・細かいところや、奥のところにブラシが届かないな。どうすればいいのかな

【洗濯物たたみ】

- ・四角になるように端の方からたたんでいこう
- ・きれいな四角になったぞ
- ・別のシャツも同じ大きさに揃えたいな
- ・あれ？大きさがばらばらになっちゃった。しまいにくいな

○自分が目指したい「おてつだいマスター」に向け、自分の考えた方法で実践を行う。

○他者のやり方に目が向くように、同じ内容のお手伝いを行う子どもが近くで活動できるようにしておく。

【窓ふき】

- ・雑巾を水で濡らして拭いてみよう
- ・雑巾が少し黒くなったから汚れは取れている気がするな
- ・濡れたところが乾いたら水の跡ができてしまった。雑巾の絞り方がよくないのかな

【掃除】

- ・ほうきとちりとりで床を掃除しよう
- ・ちりとりになくさんごみが集まったぞ
- ・掃除をしたはずなのに、またごみがある。どうしたらごみを全部集められるかな

○1回目と2回目の比較ができるようにipadを使い、写真に収めておく。

○次回の話し合いで成果や課題を伝えられるように1回目の実践のふりかえりを書く時間を設ける。

③ <やってみてどうだった？うまくできたかな？>

- ・洗う前よりも綺麗になったけど、すみっこに汚れが残ってしまった
- ・同じ大きさにたたみたいんだけどうまくいかなかった
- ・濡れた雑巾で拭いた後、時間が経って窓が乾くと筋が出てくる

<次にやるときはどうしたい？>

- ・洗うための道具を変えて挑戦してみたい
- ・〇〇さんのやり方を試してみたいな
- ・お家の人に聞いて、やり方を教えてもらおうとおもうよ
- ・図書室に掃除の本がないか調べたいよ

④ (本時) <おてつだいマスターをめざしてやってみよう②>

【上靴洗い】

- ・大きいブラシと小さいブラシを持ってきたら、細かいところの汚れが取れるようになったよ

【洗濯物たたみ】

- ・たたみ方を揃えたら、服が同じ大きさでたためるようになった。ズボンも同じ大きさにできるかな

【窓ふき】

- ・濡れた雑巾と乾いた雑巾を用意したら、水のシミみたいなのが残らなくなって前よりもすっきりしたな

【掃除】

- ・真ん中だけじゃなくて隅のところもほうきで掃いたら今までよりもごみが残らなくなったよ

⑤ <他の人がめざした「おてつだいマスター」を聞いてみよう>

- ・上靴を洗うときには、洗剤とブラシが必要なんだね。棒がついた束子みたいなブラシが使いやすいんだね
- ・洗濯ものをたたむとこんなにこんなに小さくなるんだね。体操着を持って帰るときもこの方がいいね
- ・今まで窓を拭くときは水拭きだけ使っていたけど、最後に乾いた雑巾で拭き取ると跡が残らなくてすっきりするんだね。学校の掃除でやってみるよ
- ・他のお手伝いもやってみりたいな

⑥ <おてつだいマスターになれたかふりかえろう>

- ・服をたたむとききれいにしまえることがわかったよ
- ・最初は上手に洗えなかったけど、友達のやり方を真似したら細かいところまできれいにすることができてうれしかったよ
- ・窓を拭くと思っていたよりも汚れていることがわかったよ
- ・家の掃除と同じように学校でも掃除をしたら、たくさんの埃を集めることができたよ

- ・これからも上靴洗いを続けていきたいな
- ・自分の服だけでなく、家族の服もたたんでみたいな
- ・〇〇さんがやっていた窓ふきも楽しそうだからやってみたいって思ったよ
- ・自分のことをすることが家族のためにもなるってわかった。1年生だから自分のことは自分でするようにしたいな
- ・お手伝いって楽しいって思えた

○次時にどんなことをすれば、より上手にできるか考え、試すことができるように「うまくいったこと」「うまくいかなかったこと」を分類して板書しておく。

○自分のやり方を客観的に捉え、次時に必要なものを考えられるように同じ内容のお手伝いをしている子ども同士が話し合う時間を設ける。

○1回目との比較ができるようにipadで写真を撮れるようにする。

○他者のやり方をみて、いいなと思ったものを試したり、アドバイスをもらったりできるように、同じ内容のお手伝いを行う子どもが近くで活動できるようにしておく。

○子どもができたことを自覚し、達成感や満足感を得やすいように、異なるお手伝いをした友達に自分のお手伝いを伝える場を設ける。

○他のおてつだいの共通点を見つけ、おてつだいの幅を更に広げられるように全体共有の時間も設ける。

○単元全体を通してできるようになったことを振り返り、自分の成長を感じられるようにふり返りの場を設ける。

○家族の一員としてお手伝いができた実感がもてるように、あらかじめ保護者に書いてもらったアンケートの結果を提示し、家族の気持ちに触れられるようにする。